

日本摂食嚥下リハビリテーション学会 eラーニング対応

第6分野

小児の 摂食嚥下障害

Ver.2

日本摂食嚥下リハビリテーション学会 編集



e-learning



医歯薬出版株式会社

eラーニング 受講方法

(日本摂食嚥下リハビリテーション学会 HP より一部改変)

▶ 受講手続きと有効期限

受講には、日本摂食嚥下リハビリテーション学会に入会している必要があります。

会員が下記の手順に従って受講申請し、それが認められると、ID とパスワードが発行されますので、ID とパスワードの有効期限内(申し込み月の翌月1日より1年間)に受講を終了してください。有効期限内に修了できない場合は再度受講申請が必要となりますので、ご注意ください。

▶ 受講申請

eラーニング受講申請はオンラインで行います。

http://www.jsdr.or.jp/e-learning/e-learning_application2.html

- 1) 会員番号、氏名、所属、メールアドレスを入力し、「次へ」をクリックして次画面へお進みください。
- 2) 入力内容に誤りが無いことを確認した後、「申請」ボタンをクリックします。
※入力内容を修正する場合は、「戻る」ボタンを押して入力画面へお戻りください。
- 3) ご登録メールアドレス宛に、ID とパスワード、ログイン URL が送付されます。
(2～3日経過してもログイン情報メールが届かない場合は、事務局までご連絡ください。)
- 4) メールに記載のログインページより ID とパスワードを入力し、受講を開始してください。

▶ 受講コースの選択

- 1) ログインすると、以下の画面が表示されます。
講座名称「日本摂食嚥下リハビリテーション学会 eラーニング Ver.2」をクリックしてください。

小児の摂食嚥下リハビリテーションの特殊性、障害の分類と特徴

Lecturer ▶ 弘中祥司

昭和大学歯学部スペシャルニーズ
口腔医学講座口腔衛生学部門教授

学習目標 Learning Goals

- 小児の摂食嚥下における障害特徴が理解できる
- 小児の摂食嚥下障害の症状が原疾患を考慮して分類できる
- 摂食嚥下リハビリテーションにおける小児の特殊性が理解できる

▶ Chapter 1

小児の摂食嚥下リハビリテーションの特殊性

→ (eラーニング▶スライド2)

小児の摂食嚥下リハビリテーションにおける特殊性として、

- ① 摂食嚥下器官が成長発達期にある。
- ② 摂食嚥下にかかわる器官以外の身体の諸器官が成長と機能発達の途上にある。
- ③ 精神心理面が発達の途上にある。
- ④ 発達途上にある小児の摂食嚥下障害の原因となる疾患の特徴を理解する必要がある。
- ⑤ 育児環境を十分理解したうえで、育児的な視点からの対応が必要となる。

という5点を考慮した対応が必要になることがあげられる。また、機能発達の遅滞も大きな因子となる(図1)。

Chapter 1の確認事項▶eラーニングスライド2対応

- 1 小児の摂食嚥下障害の特殊性を理解する。
- 2 小児の摂食嚥下リハビリテーションの基本概念を理解する。

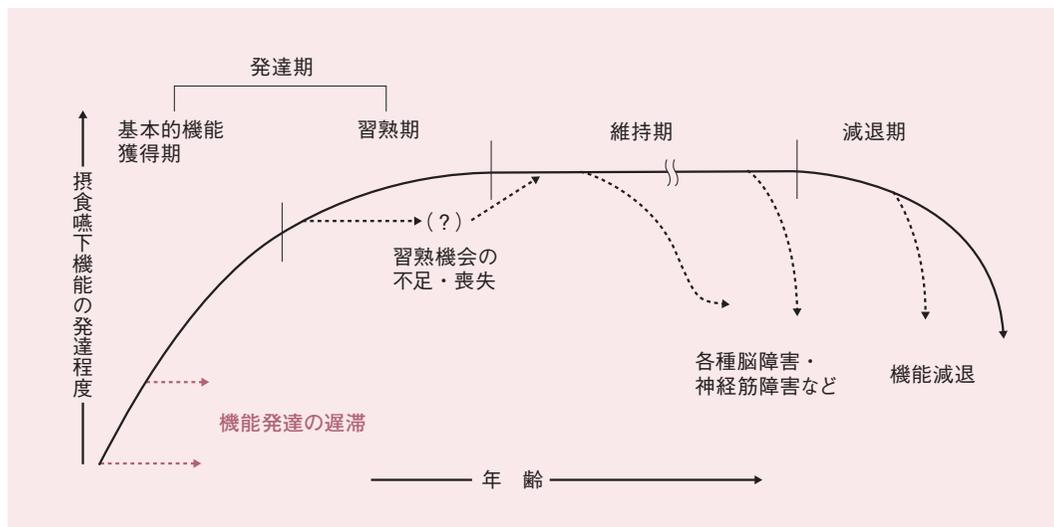


図1 摂食機能のエイジングの各段階と障害発生(金子, 1989. ²⁾を一部改変)

表4 手づかみ食べ機能獲得期

発達の特徴的な動き
頸部回旋の消失
手掌での押し込みの消失
前歯での咬断
口唇中央部からの捕食

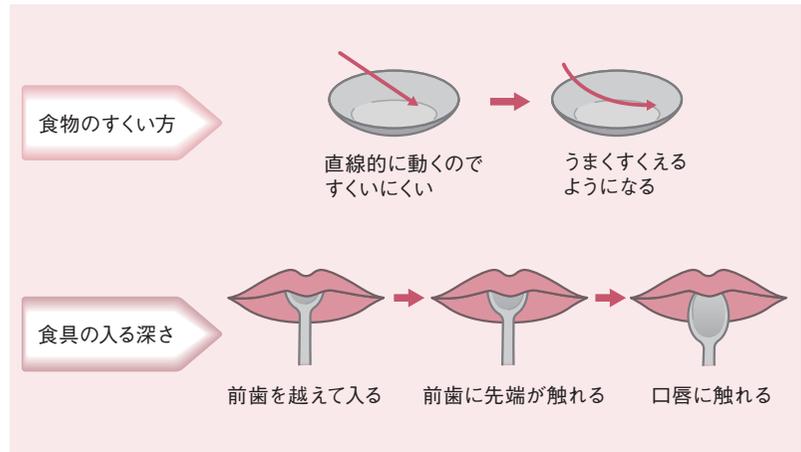


図4 食具食べ機能獲得期

段階的に上達し、手づかみから、スプーン、フォーク、箸へとスキルアップする。手と口の機能発達と協調運動が高度に求められる。

▶ Chapter 2-5の確認事項 ▶ eラーニング スライド 10 対応

- 1 すりつぶし機能獲得期においてみられる特徴的な摂食動作を理解する。
- 2 1の動作を行うためには、それまでにどのようなことを体験している必要があるかを理解する。
- 3 1の動作を行っているとき、口角はどのような動きをみせるかを理解する。

6) 自食準備期 → (eラーニング▶スライド11)

これまで口腔機能発達がメインだったが、手指を用いた遊びを通して、手と口の協調運動が開始される。この時期を自食準備期とよぶ。

▶ Chapter 2-6の確認事項 ▶ eラーニング スライド 11 対応

- 1 自食準備期でみられる発達を理解する。
- 2 1の発達は、どのようなことによって獲得されていくかを理解する。

7) 手づかみ食べ機能獲得期 (表4) → (eラーニング▶スライド12)

手指を使って食物を口腔内に運ぶ機能発達期を指す。体幹保持が安定し、徐々に手が体幹から離れるようになり、やがて前方から口唇中央部に運べるように発達する。

▶ Chapter 2-7の確認事項 ▶ eラーニング スライド 12 対応

- 1 手づかみ食べ機能獲得期においてみられる発達の特徴を理解する。
- 2 手づかみ食べ機能獲得期において体幹保持はどうなっていくか。また、それによってどのようなことが行えるようになるか理解する。

乳幼児の摂食嚥下機構の解剖学的発達

摂食嚥下機構は、新生児期から幼児期にかけて、解剖学的にも大きく変化する。この解剖学的変化は摂食嚥下機能の発達と密接に結びつくため、その変化を理解しておくことが必要となる。

吸啜・嚥下動作は、胎生期からみられることが、よく知られている。成熟児では、出生時に哺乳に関連する探索反射、吸啜反射、口唇反射がみられる。そして乳児期から幼児期にかけて、哺乳

から咀嚼へと摂食様式が変化する。嚥下の調節機構としては脳幹網様体が、大脳皮質の制御のもとに、延髄嚥下中枢の興奮性を調節する。

新生児の口腔内の構造は哺乳に都合よくできており、哺乳時に陰圧形成しやすいように頬の内側の脂肪床が厚く、乳首が入る上顎には哺乳窩といわれる凹みがみられる。下顎が小さく、歯は生えておらず、軟口蓋から喉頭蓋までの距離が短い。また舌骨と下顎骨の距離が短く、舌骨と喉頭部の軟骨との距離も短い。このため、哺乳時にはほとんど呼吸を停止しないでリズムカルに飲むことができる(図1)。

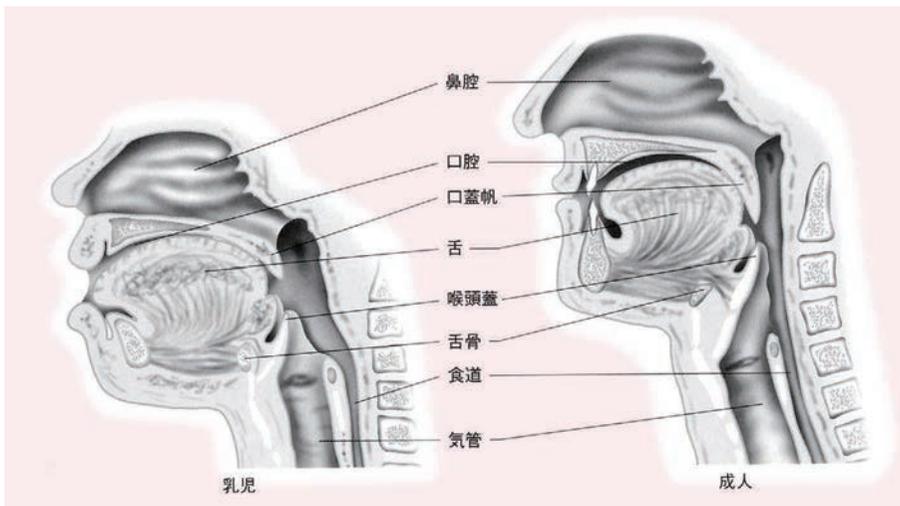


図1 乳児と成人の口腔・咽頭の比較(藪島, 田角, 向井, 1998. ¹⁾)

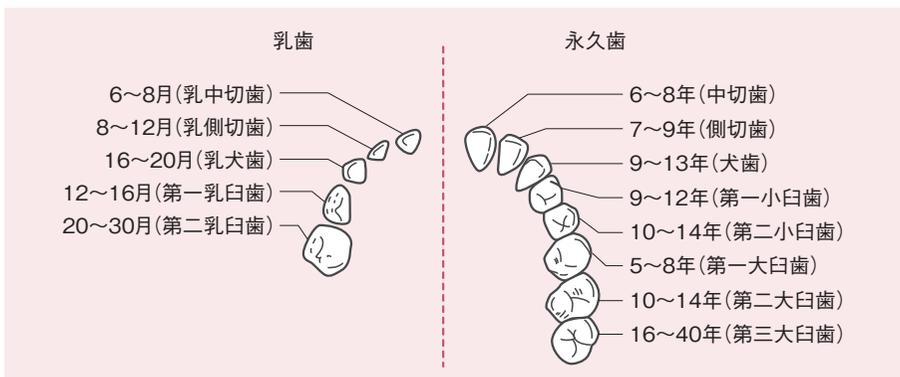


図2 乳歯、永久歯の大きな萌出年齢